

中学生 被災地を駆ける



東日本大震災の発生から10年。「今できることプロジェクト」は本年度、「次世代への伝承啓発」に力を入れ、新たな企画を実施しました。具体的に取り組んだのは、震災当時はまだ幼かった中学生に被災地を訪ねてもらい、あの日の時何があったのかを学びつつ、復興のいまを自分の目で確かめ、発信してもらう企画です。本特集は参加した仙台市立五橋中学校、東北学院中学校、宮城学院中学校の3中学校の生徒42人が記者となって被災地取材に挑戦し、それぞれの視点で記事にまとめたレポートです。震災の記憶と教訓を、世代を超えて明日へ。学校で家庭で職場で一読いただき、伝承のバトンをつないでいただければ幸いです。

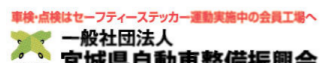
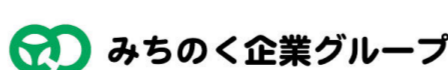
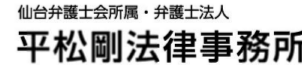
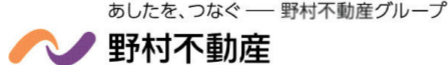
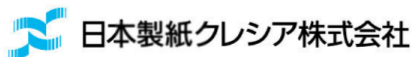
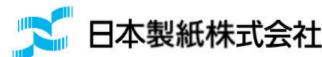
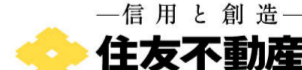
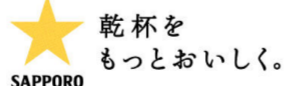
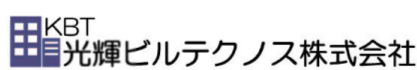


私たちが、復興のために「今できること」をともに考え、このプロジェクトを推進していきます。

河北 今できること

検索

facebookページもあります。



◎後援／宮城県、仙台市、石巻市、名取市、松島町、七ヶ浜町、南三陸町、宮城県市長会、宮城県町村会、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会 ◎協力／一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構

今できることプロジェクトとは...

東日本大震災の翌年2012年より、震災の伝承や啓発、風化の防止を目指し取り組んでいるプロジェクトです。毎年、読者と賛同企業と河北新報社と一緒に「何ができるか」を考えアクションしており、真の復興を果たすまで継続して取り組んでまいります。



仙台市立五橋中学校 仙台市青葉区五橋2の2の1 生徒 638人 校長 佐藤 正幸

大川小は未来拓く場所

語り部・佐藤さん「決断と行動力で命守って」



震災遺構として整備が進められている大川小学校の前で、佐藤さんの話に聞き入る五橋中学生。大震災当日だけでなく、震災以前の学校の様子や、震災後の取り組みについて分かりやすく説明する佐藤さん

私たち、仙台市立五橋中学校の1、2年生10人は、昨年10月24日に石巻市内で取材を行いました。閉校した石巻市立大川小学校を訪れ、「大川伝承の会 共同代表・佐藤敏郎さんの語り掛けに耳を傾けました。同市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデン」では徳水博志さんから話を聞き、緑あふれるガーデン内を散策しました。また一般社団法人「フィッシャーマン・ジャパン」代表理事でワカメ漁師の阿部勝太さんから、海洋環境の問題や、若手漁師の育成について説明を受けました。

【2年三浦颯太、1年泉田百合香・松井奏絵】 私たちはまず最初に大川小学校を訪れ、大川伝承の会共同代表の佐藤敏郎さん(67)に話を聞きました。海から3・7km離れた大川小には震災時、高さ8・6mの津波が襲い、児童と教職員合わせて84人が犠牲になりました。現在は被災した丸い形の校舎が残っていますが、周囲に住宅はなく、工事車両などが行き交う殺風景な印象でした。

「震災前は家が並び、店も病院も郵便局もあって、子どもたちは走り回っていました。そんな様子を想像してくださいます」と佐藤さんは静かに語ります。佐藤さんはここで、当時6年生の次女みずほさんを亡くしました。「3月11日は娘が進学する大川中学校の制服が届く日でした。家に帰ったら制服を着るのを楽しみにしていたのですが、みずほさんと対面できたのは3月14日。ブルジョアに泥だらけの小中学生

並べられ、その1人でした。佐藤さんの妻が娘の名前を呼ぶと、目から涙が流れたように見えました。あの日、地震が起きてから約50分の間、子どもたちは校庭に立ちまわった末、裏山でなく北上川に向かつて避難を始め、わずか1分後に津波にのまれま

した。また裏山に逃げることを主張しつらかった雰囲気をおかしい世の中になつてほしい」と言いました。今回事業をまとめたが、佐藤さんは「大川小は未来を拓く場所です。あの日のことを知ったみなさんが、何か変わって欲しい。未来を拓くことになりまし」と話してくださいます。「防災はハッピーエンド、つまり助かるためにあります。恐怖でなく希望を語ってください」と呼びかけました。

【2年赤間紗桜・伊本怜生】 最後に向かったのは、石巻市北町の十三浜。ワカメの養殖をしている漁師の阿部勝太さん(35)に海洋環境問題について教えてもらい、塩蔵ワカメの袋詰め体験をしました。阿部さんは「海が汚れる、海水温が上がって魚が取れなくなる」と一魚を取るとの光に包まれた光景は

「小さな楽園」のように、香・1年奈良悠生・小久保寿龍。私たちが次に向かったのは、石巻市雄勝町の「雄勝ローズファクトリーガーデン」。一度全てを津波に壊された地に広がる、花と緑と日の光に包まれた光景は

「希望の花が咲く楽園」行動起こす大切さ説く。雄勝ローズファクトリーガーデン 徳水さん。の敷地に母親が好きたたのホオズキとナデシコを植えました。そこに支援活動をしてきた千葉大学の学生さんが偶然通り掛かり、チューリップの球根を植えてもらったことになり、震災翌年に美しい花が咲きました。これをきっかけに、楽園

の専門家が全国のボランティアなどが徳水さん夫妻を支援し、ガーデンは年々成長していきま。現在は約2000平方メートルの敷地に数万株のバラやハーブなどが植えられています。「とても珍しい品種もあるんです」と語っていました。ガーデンで企業研修や学校の教育旅行を受け入れ、交流人口の拡大と震災伝承をしています。また「北限のオリーブ」やハーブを育てて商品化し、雇用を生み出すとしています。

「希望の花が咲く楽園」行動起こす大切さ説く。徳水さんは「震災直後には、自分ができること、花を植える行動を起したことで、誰かが芽生えた。人とつながり、心の癒やしにもつながりました」と、言葉の意味を説明します。そして「中学生の皆さんの中には、受験勉強やいじめなど、つらい世界に直面している人もいます。でも、一歩行動を起こせば、必ず助けられる人がいることを忘れてください」と話してくれました。私達は、被災者や被災地を思いやる皆さんの愛があふれた「雄勝花物語」を聞きました。季節ごとに違う姿を見せてくれる小さな楽園から、雄勝町そして世界中に幸せの輪を広げてほしいと思いました。

海の汚染や漁師減 課題 フィッシャーマン・ジャパン 阿部さん



十三浜の漁港で、海洋問題や漁業を取り巻く環境を丁寧に解説する阿部さん

「若手育成に力」。環境問題について教えてもらい、塩蔵ワカメの袋詰め体験をしました。阿部さんは「海が汚れる、海水温が上がって魚が取れなくなる」と一魚を取るとの光に包まれた光景は

「漁師が減っていること」の二つが、私たちの食卓にも影響する大きな問題だと指摘します。具体例の一つは、マイクプラスチックによる海の汚染です。ペットボトルやごみ袋などが目に見えないほど細かくなったもので、海に生息する生物が飲み込んでしまい、それを私たちが食べることで、私たちの健康に悪影響がある恐れがあります。

阿部さんは「プラスチック製品を使わないなど、身近にできることから始めてほしいです。魚を食べる時には、海や漁師のことをよく想像してください」と話していました。阿部さんの話を聞いて、海は私たちが密接に関わっている、私たち一人一人の行動が海に生息する生物の生活をも大きく変えてしまふことが分りました。スマートフォンは紙製品を使う、節電を心がけるなどといった、自分ができるところから始めたいと思います。これからも魚が食べられるよう、漁師が増えることを願っています。

わたしたちが作りました 【2年】三浦颯太、高松優奈、遠藤はる香、伊本怜生 【1年】泉田百合香、松井奏絵、奈良悠生、小久保寿龍、小山田陽輝

想定外にも対応して避難を

一番心に残っているのは、佐藤敏郎さんが話された「大川小学校は確かに悲しい場所ではあるが、未来を拓く場所である」という言葉です。自分を含めて若い人たちが震災を語り継ぎ、災害が起きて誰も悲しまない社会を作っていくべきだと強く感じました。そのためには、地域ぐるみで避難訓練をしたり、日頃から家族で話し合ったりして、防災意識を高く持つことが大切だと思いました。

「甘い考え」やめて命を守る

今回の取材を通して、みなさんに一番伝えたいことは「自分も、大切な人も、みんな災害に遭う可能性がある」ということです。佐藤敏郎さんはこう話されていました。「自分やあなたの大変な人が、災害にあつたらどうするかを考える。これが想定です」と。私は今まで、自分は大丈夫だろう、家族は大丈夫だろうと考えていましたが、その甘い考えで大変な人を救えない。このことを強く感じました。私は取材後、大地震が起きたことを想定して、自分は地震が起きても本当に大丈夫か、家族がいる場所は本当に安全なのかという点について、家族と話し合いました。これを読んでいるあなたも、あなたの大変な人も決して例外ではありません。いつ起こるか分からない災害。今からしっかり「想定」をして、命を守るための行動を一緒に考えていきましょう。

大震災を「自分事」と捉えて

佐藤敏郎さんのお話を伺って、「どんな瞬間も当たり前ではない」と強く感じました。かつて大川小学校で子供たちが遊び、笑った「当たり前」の日々は、震災で奪われてしまいました。「恐ろしいのは津波ではなく、油断や忖度をしてしまう自分自身の心です」。佐藤さんの言葉にハッとさせられました。私は震災への恐怖心から、自分や自分の大切な人が被害を受けたら一ということ

被災地に行き震災を感じて

私は取材を通して、震災は絶対に風化させてはいけないと、あらためて強く感じました。私は取材前、被災地を自分の目で見たことがほとんどありませんでしたが、実際に行ってみると、画面越しでは知ることができなかった迫力や悲しさを肌で感じる事ができました。大川小学校では、震災前の学校の様子や子どもたちの写真を見て、目の前の光景との違いに言葉を失いました。「今

「諦めない心」が未来を開く

今回の取材で「諦めない心が未来を開く」ことを学びました。語り部の佐藤敏郎さんにお話を伺い、私の中でイメージする「震災」が変わったからです。私は、震災はとても悲しく、つらくて、大切な人を亡くした人は立ち直れないかと思っていました。しかし、それは大きな思い込みでした。今回お話をいただいた佐藤さん、雄勝花物語の徳水博志さん、漁師の阿部勝太さんの3

前を向き続ける大切さ学ぶ

漁師の阿部勝太さんのお話を伺い、前を向き続けることの大切さを実感しました。「3・11」は沿岸の町を破壊し、大勢の命を奪いました。水産業も例外ではなく、船や道具のみならず漁師の人たちの心をもさび付かせました。そんな中「水産業を未来に残そう」と阿部さんが「フィッシャーマン・ジャパン」を立ち上げ、若い漁師の育成に取り組んでいます。漁師になるのが難しい「壁」を壊そ

うと、体験教室なども行っています。私は阿部さんが震災を経てもなお、水産業の復興に向けて努力し続けていることに尊敬の念を抱きました。日本は周りを海に囲まれており、私たちの生活と海は密接に関わっています。日本の水産業が衰退しているのは、とても残念です。まずは海のいとも悪い面もどちらも知ることで、水産業の復活につながっていくのではと思いました。

聞いて、知って、同世代へのメッセージ

三浦 颯太 2年

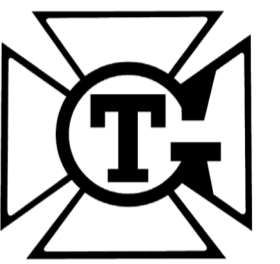
高松 優奈 2年

遠藤 はる香 2年

泉田 百合香 1年

小山田 陽輝 1年

東北学院新聞



東北学院中学校

仙台市宮城野区小鶴字高野
123の1
生徒 466人
校長 阿部 恒幸

地震・津波 甘く見ないで

南三陸・三浦さん「自然の恐ろしさ伝え続ける」



②海を眼下に望む高台に建つ旧戸倉中学校の校舎を背に、体験を語る三浦さん。津波は1階の天井近くまで達した
③津波襲来時の写真を手に、三浦さんは当時の様子を生々しく語った

僕たち東北学院中学校の1、3年生15人は、昨年10月31日に宮城県南三陸町で取材をしました。津波が押し寄せた南三陸町立戸倉中学校(現在は閉校)の校舎前で、当時2年生だった三浦貴裕さんに話を聞きました。志津川川を望む高台にある「海の見える命の森」では、現場責任者の阿部寛行さんから説明を受けた後、カエデの苗木を植樹し、石窯でピザ作りにも挑戦しました。最後に入谷地区の宿泊研修施設「いりやど」を訪れ、震災時に救援活動を行った元消防団副団長の阿部博之さんにインタビューしました。

「自然を甘く見てはいけません。思い出の詰まった自宅はもちろん、大好きな祖父や祖母まで失った三浦さんの切実なメッセージです。」

「自然を甘く見てはいけません。思い出の詰まった自宅はもちろん、大好きな祖父や祖母まで失った三浦さんの切実なメッセージです。」

楽しく体験 減災学が

南三陸・整備進む「海に見える命の森」

津波発生時は避難目標に



④プロジェクト代表の阿部寛行さん。この日はピザ作り体験も主導し、生徒に体験の楽しさを伝えた
⑤「海に見える命の森」で植樹をする東北学院中学生

【3年】菅場隆甫、堀内千凜、羽、2年柴田光・菅原夏弦、1年平山昊
海抜20mの高台に建つ旧戸倉中学校。志津川川を一望するこの場所、めぐり望む男性は当時を振り返り、「あの日、ここまで津波は来ないだろうと思っていました。南三陸研修センターのスタッフ三浦貴裕さん(24)は、生まれ育った南三陸町で震災の経験を後世に伝える語り部活動をしています。ここは海岸から100mほどですが、海面はほろり下。とても津波が来るような場所には思えません。しかし現実とは違いました。津波は建物1階を水没させる22・6mに達したのです。震災当時、三浦さんは戸倉中2年生。卒業式の準備を終え、帰りの会をしながら教室で激しい揺れに襲われました。他の在校生と一緒に校庭に避難しているとき、「山さ逃げろ」。異変を察知した先生の叫び声で無我夢中で真山に駆け上がり、間一髪で命拾いしました。振り返ると、海面が信じ

【3年】菅場隆甫、堀内千凜、羽、2年柴田光・菅原夏弦、1年平山昊
震災の津波で浸水した国道45号から山道を登ること5分。目の前に青く輝く志津川川が広がりました。南三陸町地区の丘で整備が進む「海に見える命の森」。震災の犠牲者を悼む鎮魂の地であり、日頃助かるだけでなく、誰かを助けることができます。また高い防災意識を持てば、津波などから逃げ遅れることを防ぐことにもつながります。僕は今回の被災地訪問で、これまでの自分の生活がいかに平穏で幸せだったか知りたかった。防災用品をまとめた「防災バッグ」を持ち歩くことなど、自分でもできることを実践しながら、備えの方法を周囲に広めていきたいと思いました。

【3年】菅場隆甫、堀内千凜、羽、2年柴田光・菅原夏弦、1年平山昊
「自然の怖さ」を伝えるには、体験が効果的。阿部さん自身、震災後にボランティアとして支援に携わったことが縁で、仙台市から移り住み、活動をけん引しています。森には「命の木」としてエドヒガンザクラが多く植えられています。樹齢が1000年を超えることもありますが、津波の心配のない高台に植え、津波襲来時には避難目標として、世

災害時まず自分の命を守る



僕は今回のプロジェクトで一番印象に残っているのは、取材させていただいた方々全員が「自分の命は自分で守ることが大切だ」と言っていたことです。震災のような災害が起きたら、まず周りの人を助けたいと思っていた僕はとても驚きました。しかし、よく考えれば分かることです。まずは自分の安全を確保した上でないと、僕を助けるために誰かが危険を冒すことになりかねないからです。だからやはり、もし災害に直面したら、自分の命を第一に考えたいと思います。震災を体験した人から、その内容や苦労をじかに聞くという今回のプロジェクトは、初めての貴重な経験でした。実際に南三陸町を訪れ、被災直後に比べて確実に復興へ向かっていることも知ることができました。現地でも学んだことを、たくさんの人に伝えたいと思います。

菅場 隆甫 3年

「当たり前」の日常に感謝を



日常が幸せだと思い感謝すること。皆さんは忘れていませんか。私たちは当たり前のように毎日食事ができ、当たり前のように寝る場所があります。でも震災当時、被災地で何んげもなく生活していた人はいたのでしょうか。ほとんどいなかった僕は思います。僕は今回の取材で南三陸町に行き、感じたことがあります。それは地元の方々ほとんどが、いつも笑顔だったと

藤原 飛羽 3年

いうことでした。家族や友人を亡くしても、昔からの故郷が変わってしまっても、今、自分の命が続いていることに最大限の感謝をしようという心持ちから湧き出る笑顔だと、僕は感じました。何かを失ったとき「もったいなく感謝しておけば良かった」という後悔をしないために、目の前に与えられているものに感謝することが、私たちに「今できること」ではないかと現地を訪ねて思いました。

「身の守り方」知って備える



災害などの非常事態時に、自分の安全を確保した上で人を助けることの大切さを学びました。今回お話をいただいた方々は、何らかの形で他人の人を助けようとしていたが、前提として自分の身の安全を確保することが大切だとおっしゃっていました。なので、まずは他人に頼ることなく、一人一人が自分の身を守る事が災害時の大前提なのだと言っていました。僕らの世代だと震災のこ

小林 諒真 3年

とをはっきりと覚えている人はまれで、自分の身の守り方を熟知している人は少ないと思います。同世代に被災地で学んだことをしっかり伝えて、いつ起こるか分からない災害に対応できるようにしていきたいです。今も大変なコロナ禍ですが、まずは自分が感染しないように努め、コロナと最前線で戦っている医療関係の方々を支援することが最善の行動だと思います。

災害発生後に慌てても遅い



今回の取材を通して学んだこと、そして周囲に伝えていきたいと思ったことは「災害が起こってから慌てては遅い」ということです。お話を聞いた方々は皆「自分の身は自分で守ることが大切」とおっしゃっていました。そのため、例えばラジオや非常食を携帯するなど、一人一人が平時からできることをしておくことが重要だと学びました。こうした備えをしておくことで、いざという時、自分が

青沼 怜 2年

助かるだけでなく、誰かを助けることができます。また高い防災意識を持てば、津波などから逃げ遅れることを防ぐことにもつながります。僕は今回の被災地訪問で、これまでの自分の生活がいかに平穏で幸せだったか知りたかった。防災用品をまとめた「防災バッグ」を持ち歩くことなど、自分でもできることを実践しながら、備えの方法を周囲に広めていきたいと思いました。

忘れてならない自然の怖さ



僕が今回の南三陸町取材を通じて思ったことは二つあります。一つ目は「自然の恐ろしさ」です。災害はいつどこで起こるか分からない上に、一瞬で多くの命を奪います。実際、震災でも多くの人が犠牲になり、行方不明になっています。自然の怖さを忘れてはいけません。二つ目は「日常のありがたさ」です。今回取材した被災者の皆さんは、口をそろえて「あらためて日常が幸せだと

平山 昊 1年

感じた」と訴えていました。災害でいつも通りの暮らしが奪われて、初めてその価値に気がつかれるのは皮肉なことですが、お話を聞いて、あらためて納得させられました。僕は今回の取材を通じて「自然の恐ろしさ」と「日常のありがたさ」を忘れずに、同時に後輩たちにも伝えていきたいと思いました。

募金足掛かりに被災地支援



震災が起きた時、僕はまだ3歳でした。だから当時の記憶はほとんど残っていません。今回、南三陸町を訪れて震災を経験した3人の方にお話を伺いながら、「自分たちが今できることは何か」を考えました。僕はボランティア活動だと思いました。ただ、一口にボランティアといっても、活動内容は多岐に渡ります。それ故に、僕たち中学生にもできる分野があるのです。その一

藤原 温剛 1年

つは「募金」だと考えました。現地への移動手段がなくても、体力が十分でなくても、誰かの役に立てるからです。震災の被害に遭った地域では、今なお失ったものを取り戻すことができない人が多くいることを、今回の取材で知りました。募金を足掛かりに末永く、何らかのボランティア活動を続けていきたいと思いました。

人命救助内陸から応援

入谷消防団 元副分団長・阿部さん



津波で被災した志津川地区の救援に入った体験談を語る阿部博之さん。内陸集落の備えの大切さを訴えた

【3年】小林諒真、2年青沼、1年坂井隆、1年藤原温剛
「自然を甘く見てはいけません。思い出の詰まった自宅はもちろん、大好きな祖父や祖母まで失った三浦さんの切実なメッセージです。」

わたしたちが作りました

- 【3年】菅場隆甫、熊谷虎汰郎、小林諒真、藤原飛羽、堀内千凜
- 【2年】青沼怜、伊藤琉音、熊谷孝太郎、柴田光、菅原夏弦
- 【1年】川元琉星、坂井隆一郎、庄司宏知、平山昊、藤原温剛

被災者の「心の復興」は途上



現在、閉上を含め多くの被災地は、被災したことを感じさせないほどきれいになってきています。しかし被災者の「心の復興」は、まだまだ途上なのではないかと思いがちです。あの日の出来事をまだ語る事が出来ない人、水が怖くてお風呂に入るのをためらう人、蛇口をひねったときその瞬間に目を瞑ってしまう人。そのような人たちがまだいるという現実を、語り部の丹野祐子さんに伺って、初めて知り

堀切こうご 3年

ました。多くの人にこの現実を見つめ直してほしいと感じました。「あの日、何があったのですか。」被災された方に声を掛け、一人一人に寄り添い、震災を過去の話にしてはいけないこと。それが心の復興へと向かうために、私たちが今できることなのだと思います。人々の心に再び笑顔の花が広がるよう、私たちが今できることを一歩ずつ進め、今ある命を大切に生きていきたいです。

聞いて！知って！同世代へのメッセージ

津波被害は他人事ではない



お話を伺った丹野祐子さんから3人は、元々閉上と関わりが深かったわけではなく、結婚やお店の出店などで閉上に縁を持つようになりました。私自身、津波被害を身近に感じていませんでしたが、今回参加して「将来、誰でも津波被害に遭うかもしれない」と感じました。また「地震と津波のことを学んでいたつもり、用意していたつもりだった」という丹野さんの言葉にハッとしまし

齋藤はるな 3年

た。これを機に、もう一度用意直そうと思えます。皆さんも、防災の授業や、被災地に行ったときに「もし自分が相手の立場だったら」「もし自分の住んでいる町でこのような災害が起きたら」「もし今大地震が来たら」と、自分のこととして想像してみることが大切だと思います。記憶を風化させず、過去を生かして、より良い未来になるよう行動できるように、学びを深めていきたいです。

友達や家族の大切さ再認識



『さよなら』も言えずに、もう二度と会えなくなるなんて思わなかった…。震災で息子さんを亡くした、語り部の丹野祐子さんの言葉が心に残りました。震災当時私は4歳で、幼稚園から帰ってきて家に入った瞬間に大きな揺れが起こりました。津波の被害を受けた地域などの悲惨な映像や、余震におびえて不安と恐怖が絶えなかった日々の記憶は今でも思い出されます。

常盤るりか 2年

ですが、震災で自分の家や会社、そして最も大切な人を亡くされた方々は、私たちの想像を絶するほどのつらさだと、丹野さんの話を聞いて、私の周りにはいる友達や家族の存在がとて大変に思えました。閉上の方々から教わったことを、自分自身の心に刻み、そして他の人にも伝えることができたらと思っています。

助け合える「仲間」って大切



私は学んだことが二つあります。一つ目は、地震や津波を侮ってはいけないことです。「閉上には今まで大きな津波が来なかったから、震災の時も大丈夫だろうと思っていた」という丹野祐子さんの言葉が印象に残りました。今後こういった災害が起きたときは、まず津波が来ることを想定し、高齢者の方や地域の皆さんを早く避難場所連れて行き、自分と皆の命を守ろうと思いました。

男鹿奈々羽 2年

二つ目は「仲間」は困った時に助け合う、とてもかけがえのない存在だということ。では、震災でレシビなどが流失する中、震災前の味に近づくよう従業員らが試行錯誤を重ね、地域の皆さんも協力してお店や味を復活させました。「仲間」がいなかったら、早く復活できなかったかもしれない。この話を多くの人に伝えて、震災で悲しむ人を減らしたいと思いました。

命のはかなさと尊さ学べた



閉上で出会った方は皆さん親切で元気。地震と津波で数々の苦痛を経験したのに、めげずに前に進んでいました。「人はいろいろなことを経験した分だけ心が豊かになれるんだよ」。閉上で生まれ育った祖母が私に語ってくれた言葉です。閉上の方々とその言葉が重なり、祖母の歴史が見えたような気がしました。震災時の記憶はあまりありません。しかし今回の取材を

菊田あかり 1年

通して、想像よりはるかに大変な出来事だったのだとあらためて感じました。命や日常は簡単に壊れてしまうことも痛感しました。家族や友達、周りにいる方々に支えられ、いまを生き延びられることを自覚しました。周りの人と助け合える自分、命を大切にできる自分になりたいです。未来へと進む自分の気持ちや願いとしっかり向き合って、自分に何が出来るのかを探していこうと思います。

津波で中1長男亡くした閉上の丹野さん 「何より命 生き抜いて」



慰霊碑の前で説明を聞く宮城学院中学生。慰霊碑の高さはこの地を襲った津波と同じ8.4mで、いかに大きな津波だったかが実感できる。一名取市閉上「東日本大震災慰霊碑」

【3年】50嵐、2年渡邊... 宮城学院中学校の1~3年生17人は、昨年10月17日に名取市閉上地区で取材活動を行いました。津波復興記念資料館「閉上の記憶」を訪ねて、閉上中学校遺族会代表で語り部の丹野祐子さんにインタビューしました。被災して途絶えた地元の名物「かもやのカツ丼」を味わいながら、復活に携わった飲食チェーン「飛梅」社長の松野水緒さんにエピソードを聞きました。笹かまぼこの老舗「ささ圭」では、佐々木靖子さんと丹野さんから津波被害と事業再開への道のりを聞き、笹かまぼこの手焼きにも挑戦しました。

廃業危機救った手わざ 新商品開発し若者にPR

【3年】齋藤はるな、2年秦... の名取市増田にある販売店... 増田の店舗内に小さな工場を設け、手造りのかまぼこをつくることにしました。石臼で時間をかけてすり身を練り合わせ、「一つ一つで成型して手焼きします。そして完成したのが「手わざ」です。」希望です。震災から一歩を踏み出した家紋である「希望」は、新工場が稼働した今も大切に受け継がれています。



佐々木靖子さん(右)の説明を聞く宮城学院中学生。一名取市増田「ささ圭」手造りかまぼこ工房

閉上のソウルフード カツ丼復活

【3年】堀切こうご、前元... 飲食チェーン「飛梅」協力... 飛梅は、名取市閉上の商業施設「かわまち」で「かもやのカツ丼」を復活させたいと立ち上げた。閉上で生まれ育った料理人の小齋信史さんと、小齋さんが働いていた「飛梅」でした。店主夫妻の親族に話を聞き、食べた人の「舌の記憶」も頼りにして、試作を重ねました。さば節でだしを取り、味付けはやや濃いめに、松野さんは「甘じょっぱさを忠実に再現するため、だしをゆるりと砂糖のさじ加減が難しくかったです」と振り返ります。



宮城学院中学校
仙台市青葉区桜ヶ丘9の1の1
生徒 172人
校長 杉本きみ子

公太さんと、夫の両親が津波の犠牲となりました。「すべての建物ががれきりという名に変わり、多くの命が失われました。あの日見た光景はこの世の地獄でした」。震災前約5000人が暮らしていた閉上地区は、津波で約750人が亡くなり、また約40人は行方不明のままとなっています。丹野さんは震災後「なぜ自分だけ助かって、家族3人の命を救えなかったのか」と自問の念に苦しみました。「その後悔み、語り部の活動につながっていきまし



したが、大震災でお店は津波に飲み込まれ、店主夫婦は犠牲になりました。しかし、丹野さんと松野さんが立ち上げた「飛梅」が、かつての味を再現し、閉上の人々に長年愛された素朴な味わいが、たくさんの人々の思い出と努力で復活したという話を聞いて、「かもやのカツ丼」がよりおいしく感じられました。閉上にはおいしい食べ物がいっぱいあるので、みなさんも足を運んでみてください。

わたしたちが作りました
【3年】五十嵐凛、齋藤はるな、堀切こうご、前元葵華
【2年】渡邊結、阿部雅、秦くるみ、男鹿奈々羽、常盤るりか、中村瑞姫
【1年】影澤あかり、菅野舞、志摩有希乃、柏倉彩乃、菊田あかり、栗山佳子、鈴木ひかり